

共在状態における笑いの連鎖

Laughter sequence in co-presence

齋藤 巴菜, 坂井田 瑠衣
Hana Saito, Rui Sakaida

公立ほこだて未来大学
Future University Hakodate
g2123023@fun.ac.jp

概要

本研究では、人が共在している状況で、笑いうる (laughable) 出来事が起きた時に、どのようにして笑いの連鎖によってその出来事に対する理解が共有されるのかについて分析する。第一筆者である齋藤が同期学生と大学の校舎内で過ごす様子を収録したビデオを映像分析した結果、共同注意が達成され、互いに笑いうる出来事を笑いうる出来事として認識できたときに、笑いが連鎖されることが明らかになった。

キーワード：笑い、相互行為分析、参与観察

えられる。そこで本研究では、日常生活場面の例として、大学院生である第一筆者と友人が大学内のオープンスペースで過ごす場面を取り上げる。その様子をビデオで収録したものをデータとし、第一筆者による参与観察と、収録したビデオデータの相互行為分析を併用する。参与観察をした上で相互行為分析を行うのは、共在している人々の関係性や、それまでに共有されていた文脈についての情報が必要であるためである。

1. はじめに

本研究では、人が共在している状況で、笑いうる (laughable) 出来事が起きた時に、どのようにして笑いの連鎖によってその出来事に対する理解が共有されるのかについて分析する。

本研究は、第一筆者が、友人と会話を交わさず共在している状況で、笑える出来事が起きた時、そこにいた友人たちが、笑いを連鎖させるという様子を目撃したことから着想したものである。そのようなやりとりは、笑いを産出した人同士が、言葉を交わさないままで状況に対する理解を共有することを可能にしているのである。これは、言葉を交わさずとも、人は相互行為によって互いの認知状態を共有できるということでもある。

社会的相互行為論においては、笑いとは相互行為において秩序だった形で生じる社会的な現象であると捉える[1]。個別具体的な状況で収録したビデオデータから事例を抜粋し、人々がどのようにして笑いを連鎖させ、理解を共有しているのかを分析する。その上で、これらの複雑な相互行為を分析することが、人間が持つ動的対応力[1]の解明につながることを示す。

2. 方法

本研究で観察する笑いを連鎖させる相互行為は実際の日常生活というフィールドで起きている。なかでも気心の知れた関係にある者同士の間で起きやすいと考

3. 分析

今回の分析では、第一筆者である齋藤が2023年6月22日と27日に大学のオープンスペースで過ごす様子を収録したビデオを使用する。

今回分析に登場する人物は、齋藤、白石 (仮名)、長内 (仮名) である。白石と長内は2022年2月から齋藤と同じ研究室で活動している同期学生である。

3.1 事例1：紙が飛ぶ

まずは、3人が共在しているときに、一枚の紙 (フライヤー) が扇風機の風によって飛ぶという笑いうる出来事が発生し、それをきっかけとして、白石と長内の間で笑いが連鎖した事例を分析する。

1	@(1.22)@(1.98)
長内	@割り箸取る @割り箸の袋破る
2	\$(0.19)@(0.82)@(0.31)\$(0.28)
紙	\$浮き始める \$浮く
長内	@割り箸袋から出す @袋置こうとしたがやめる?
3	\$(0.64)@(0.25)
紙	\$上下ひっくり返りながらテーブルの上を舞う
長内	@手の動き止まる
4	\$(0.35)\$(0.38)
紙	\$着地 \$奥に飛ばされる
5	hh((鼻で笑う))
6	\$(0.30)\$(0.03)
紙	\$テーブルを滑る \$床に落ちる
7	HH((鼻で笑う))
8	hhhhh((鼻で笑う))

長内は1~2行目で、食事をするために割り箸を袋から取り出そうとしている。このとき長内の体は、長内から見て右斜め向かいにいる齋藤の方を向いている。また、長内の正面にいる白石は食事中で、白石の体は長内の方を向いていることが肩の向きからわかる。紙は2行目で風によって浮き始め、3行目で上下ひっくり返りながらテーブルの上で飛び上がる。3行目で紙がひっくり返った時に、長内の手の動きが止まったことから、この時に長内は紙を見ていたことがわかる。その後紙は、4行目でテーブルの上に落ちたあと、風によって奥に飛ばされる。この紙の動きに、白石は5行目で、鼻で笑うようにして笑いを産出することで、紙の動きを面白がるような反応をする。その後紙は6行目で、テーブルの上を滑りながら床に落ちていく。この動きに、白石は7行目で5行目よりも大きく鼻で笑いを産出する。そして白石の笑いの直後に長内は8行目で、鼻で笑いを連鎖させる。

ここでの笑いうる出来事は、紙が風によって飛ばされるということである。笑いうる出来事をきっかけに白石と長内の間に相互行為が生じたのは、どちらも笑いうる出来事に気づいており、白石と長内の間で共同注意が達成されていたからである。事例1では、白石が初めに笑いを産出し、その直後に長内が笑いを産出した。この時、白石は笑いうる出来事に気づいただけではなく、長内も笑いうる出来事に気づいているということにも気づいていたことが、白石の体の向きからわかる。このことから、共同注意が達成されていると確信した白石が一つ目の笑いを産出したことがわかる。そのため、長内も白石が何に笑っているかが理解可能となり、笑いを連鎖させたのである。

また、共同注意が達成されていたことに加えて、この出来事が互いに笑いうる出来事として理解できたことも、笑いが連鎖した理由の一つである。この事例の冒頭の約4分前に、長内の置いた紙が扇風機の風によって飛ぶという出来事が発生していた。この時白石と長内は、紙が飛ばされたことを笑いうる出来事とは認識していなかったため、はじめは驚く反応を示したが、次第に笑いの反応へと変わっていった。これにより、紙が風で飛ばされるという出来事は、互いに笑いうる出来事として理解されるものになっていた。

3.2 事例2：鼻をかむ

次に、3人が共在しているときに、長内が鼻をかんだという笑いうる出来事が発生し、それをきっかけとして、白石と齋藤の間で笑いが連鎖した事例を分析す

る。

1	白石	すごいね	
2		(0.23)	
3	齋藤	は+なでこう(.)詰まってる*のにな	
		+白石見る	
	白石		*齋藤見る
4		(0.83)	
5	白石	.u	
6	齋藤	h@[↑hh%↓h%hh[(hh)	
7	白石	[hhhh	
8	長内	[↑hhh	
	長内	@鼻すする	
	長内	%齋藤見る	
		%PC画面	
9	白石	hh%h	
	長内	%ティッシュ見る	
10	齋藤	.h@.h(.)@全然絶好[調じゃ°ない°	
11	白石	[.h:	
	長内	@ティッシュに手をのばす	
		@ティッシュとる	
12	白石	h:hh °h °	
13		(0.31)	
14	白石	.h:	
15		(0.41)	
16	白石	(¥ん¥)	
17	長内	z:::+↑z:::[↑z:::[:: ((鼻をかむ))	
18	白石	[.h [hhh	
19	齋藤	[h+↑h↓hhh	
	齋藤	+テーブル見る	
		+長内見る	
20	白石	.h	
21		(0.14)	
22	白石	もっと詰まってる(.h)	
23		(0.52)	
24	白石	.h	
25		(1.90)	
26	齋藤	.h.h	

齋藤が、オープンスペースから甘い匂いがすると発話したことをきっかけに会話が行われている場面である。1行目の「すごいね」は、匂いを知覚できなかった白石が、その匂いを知覚できた齋藤を称賛する発話である。その発話に対して、齋藤は3行目で、匂いはわかるが鼻詰まりしているという矛盾がある自分の調子についての説明を加えて返す。3行目で、齋藤は白石に視線を向けて発話している。また、白石もその視線に気づき齋藤の方を向いているため、この一連のやりとりは主に齋藤と白石の間で行われている。6行目の笑いは、3行目の内容が非合理的であるという理解を表す齋藤の反応である。それに対して、白石は7行目で笑いを返し、続けて長内も8行目で笑いを返す。長内は笑いを産出する直前に、齋藤に視線を向けてい

た。このことから、齋藤の笑いが自分に向けられている可能性があることと認識したことがわかる。長内は齋藤の笑いに対して、白石と同じように受け手として反応を返すことをきっかけに、傍参与者から宛てられた受け手に変化している。3~8行目のやりとりをきっかけに3人の間では、鼻が詰まっているということが、ここで笑いうることとして共有されたことがわかる。白石は9行目で、笑いを産出する。これは、6~8行目の拡張された連鎖としての笑いである。齋藤は10行目で、3行目の自らの発話内容を否定的に評価する。この時長内は、ティッシュをとる。白石は11,12,14,16行目で、齋藤の発話に対して笑う。その後長内は17行目で、10行目で取っていたティッシュで鼻をかむ。これに対して、白石は18行目で笑いを産出し、齋藤も19行目で笑いをすぐに連鎖させる。白石は22行目で、長内に向けて鼻が詰まっていることを指摘する。これは、鼻が詰まっていることが笑いうることとして共有されていたことを踏まえ、笑いを理解可能なものにする説明である。

ここでの笑いうる出来事は、長内が鼻をかんだことである。笑いうる出来事をきっかけに相互行為が生じたのは、事例1と同様に齋藤と白石の間で共同注意が達成されていたからである。事例2では、視覚的な共同注意は達成されていないが、聴覚的共同注意[1]が達成されている。つまり、長内の鼻をかむ音が、互いに聞こえているに違いないという確信ができるほど大きな音であったということである。事例2では、白石が初めに笑いを産出し、その直後に齋藤が笑いを産出した。事例1と同様に白石は、齋藤の体の向きが白石からテーブルへと変わったことから、共同注意が達成されていると確信したため一瞬の笑いを産出したのである。実際、齋藤も白石の笑いが理解可能となり、すぐに笑いを連鎖させている。

また出来事が笑いうるものとして理解可能だったのは、3~8行目で鼻を詰まらせていることが笑いうる出来事として共有されていたためである。そのため、普段は必ずしも笑いうる出来事として認識されない鼻をかむという出来事が、今回は笑いうる出来事となり、笑いが連鎖したのである。

3.3 事例3: キンパ

次は、3人が共在している時に、長内がキンパ（韓国風のり巻き）の容器の蓋を開けただけで食べていないように見えた（実際は食べかけであった）という笑いうる出来事が発生したものの、笑いが連鎖しなかつ

た事例を分析する。

- | | | |
|----|----------------------|--|
| 1 | 白石 | *(0.29)*(0.21)*(0.62)
*キンパ見る
*長内見る
*キンパ見る |
| 2 | 白石
長内 | h((鼻))h%
%横目で白石見る |
| 3 | 齋藤
長内 | +(0.22)%(0.15)+(0.31)
+顔あげる +テーブル見る
%テーブル見る |
| 4 | 白石
長内
白石
齋藤 | あ%け\$+ただけなんですか\$こ(h)+
%白石の手
\$右手キンパ指差す \$引いた右手口元へ
+白石の手 +キンパ |
| 5 | 白石 | [んか%い%は(h)h↑え(h) |
| 6 | 長内
長内 | [>い%や%食べた食べ@(た)<
@両手キンパ指差す
@キンパのトレー掴む |
| 7 | 長内 | @見え%て@ない%[か%もし@れない |
| 8 | 白石
長内 | [見えてな(い)(h)
@左手トレー回して白石にキンパ見せる
%白石
@右手キンパ指差す
%キンパ
%白石
@トレー戻す |
| 9 | 長内 | [(h)HH. hH. hH. hHH. h. h. hHH. h |
| 10 | 齋藤 | [(う)hahahaha(ほんつお) |

白石は1行目で、キンパが食べられていないように見えたため、長内が咀嚼していないことを確認し、再びキンパが食べられていないことを確認する。続けて白石は2行目で笑いを産出する。白石の笑いに気づいた長内は白石を見る。3行目で齋藤も、白石の笑いに反応し顔をあげる。齋藤と長内は、白石が見ているテーブルの上を見て、白石が何に笑っているかを探しているようである。白石は4~5行目で、キンパを指差しながら「あけただけなんですか今回は」と発話する。これは、長内がキンパの蓋を開けただけで食べていないことに笑ったという、笑いを理解可能なものにする発話である。5行目の白石の発話に重ねて長内は6行目で、食べかけのキンパを指差しながら、白石の理解をいったんは否定するものの、7行目で、向かいに座っている白石からは食べているのが見えなかった可能性に言及し、4~5行目の白石の発言に同調する。このとき、長内はトレーを回して白石に食べかけのキンパを見せる。7行目の長内の発話に対して、8行目で白石は、食べかけのキンパを確認し、見えていないだけであったと述べる。9行目と10行目で長内と齋藤の笑いが同時に産出される。

ここでの笑いうる出来事は、長内の食べかけのキンパが見えず、蓋が開けられただけのように見えたことである。笑いは連鎖しなかったが、その後の会話で笑いが産出されたことから、笑いうる出来事として3人の間では共通に認識できるものであったということがわかる。それは、日頃から長内の食事の方法について、齋藤と白石が疑問に思うことがあり、それについて話し合っていたこととも関連すると思われる。

事例3では、長内がキンパの蓋を開けただけで食べないということに対して白石は笑いを産出した。しかし白石が笑いうる出来事に気づいた時、齋藤はパソコンを見ており、長内はオープンスペースを見ていたため、共同注意が達成されていなかった。齋藤は白石の笑いにすぐに顔を上げて反応するが、何に笑ったのかわからなかったため、笑いを連鎖させなかった。齋藤と長内は、白石が見ているテーブルを見て笑いの対象を探す。その後すぐに白石は、自身の笑いを理解可能なものにするため、何に笑ったのか説明を始める。すると白石の笑いが理解できた長内は、白石の発話に重ねて発話を返す。そして2行目～8行目のやりとりを見て、ようやく状況を理解した齋藤は、10行目で笑いを産出した。

4. まとめ

笑いが連鎖された事例1, 2と、すぐには笑いが連鎖されなかった事例3の分析から、どのように笑いの連鎖によって出来事に対する理解が共有されるのかを考察する。

まず、友人関係のAとBが共在している時に笑いうる出来事が発生したとする。この時、笑いうる出来事に気づいたA(またはB)は、笑いを産出する場合もあればしない場合もある。笑いうる出来事をきっかけとしてAとBの間に相互行為が生じるのは、AとBの間で共同注意が達成されている場合である。事例1では白石と長内の間で視覚的共同注意が達成され、事例2では齋藤と白石の間で聴覚的共同注意が達成されていた。

さらに、共同注意が達成されていることに加えて、その出来事が互いに笑いうる出来事として理解できる必要がある。事例1および2では、笑いうる出来事が笑いうる出来事として理解できるような共有された文脈があった。

事例3では、笑いうる出来事として理解できる文脈

は共有されていたが、共同注意が達成されていなかったため笑いが連鎖しなかった。そのため白石は、自身の笑いを説明することで、齋藤と長内が自らの笑いを理解できるようにしていた。

では、共同注意が達成されるのはどのような状況においてだろうか。笑いうる出来事が起きた時の状況を構成する要素として考えられるものは様々である。例えば、共在する人々に関連する要素として、関係性、距離・位置関係、そこで共有されていた文脈などがある。一方、笑いうる出来事の性質としては、その出来事の知覚可能性、有標性、私秘性などが関係している。

事例1や2で共同注意が達成されたのは、出来事の知覚可能性や有標性が高かったためである。事例3で共同注意が達成されなかったのは、位置によって笑いうる出来事としての知覚可能性が異なったことが考えられる。このようにして、人々はこれらの要素の複雑な組み合わせをリソースとして、共同注意を達成することが見込めるかを判断していると考えられる。

他方で、共同注意を達成することができるかの判断はごく短い時間で行われなければならない。Sacks[1]によれば、笑いの有効性を実現させるためには、笑いは笑いうる出来事の直後になされなければならない。つまり、笑いうる出来事への反応であると捉えることができるほど短い時間で、出来事の後に笑いを産出する必要がある。笑いの連鎖が起こる相互行為をみることは、人間がいかにかその都度柔軟に状況へ反応できるかという、人間の動的対応力[2]の一端を解明することにつながる。

本稿で得られたのは、特定の事例における状況に依存した知見である。共在する人々に関する要素や、笑いうる出来事の性質が異なる個別具体的な状況の事例を集めて、どのように相互行為し、理解を共有するのかを明らかにすることが今後の課題である。

文献

- [1] 水川喜文 (1993) 自然言語におけるトピック転換と笑い, ソシオロギス, 17, pp.79-91.
- [2] 諏訪正樹 (2015) 一人称研究だからこそ見出せる知の本質. 諏訪正樹, 堀浩一 (編著), 伊藤毅志, 松原仁, 阿部明典, 大武美保子, 松尾豊, 藤井晴行, 中島秀之 (共著), 一人称研究のすすめ——人工知能の新しい潮流, 近代科学社, pp.3-44.
- [3] 大藪泰 (2019) 共同注意という子育て環境, 総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL, 7, pp.85-103.
- [4] Sacks, H. (1992) Lectures on conversation. Oxford: Blackwell.